

| | |
|---------------|---|
| Title | 「～のだ」の本質を求めて : 再び山口佳也氏に答えて |
| Author(s) | 佐治, 圭三 |
| Citation | 阪大日本語研究. 1 p105-p.127 |
| Issue Date | 1989-03 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/12832 |
| DOI | |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「～のだ」の本質を求めて

——再び山口佳也氏に答えて——

Pursueing the Essential Meaning of “～NODA”

——Answering Again the Question from Yoshiya Yamaguchi——

佐 治 圭 三

キーワード：～のだ ～のだから ～のなら 仮の題目 主題

(一)

述語の連体形に「の」（「ん」）が付き、それに指定の準詞「だ」（「です」およびそれらの変種、「なら」「だったら」「ゆ」などを含めて）の付いたものを、ここでは「～のだ」で表す。

「～のだ」についての論文、意見は、現在ではすでにかなりたくさん出されており、解明も進んできていると言える。筆者も≪「ことだ」と「のだ」≫（大阪外国語大学留学生別科紀要『日本語・日本文化第3号』1972年）を發表し、そこでおおよそ次のような意見を述べた。以下「～ことだ」の方は省略して記す。

(1) 「～のだ」には次のようないろいろな形があること。

- ① 主な理由は（中略）予算が、「硬直化」することをおそれているのだ。
- ② 意志のない者にもものまねだけさせて満足するのなら、猿芝居の親方と変わらないんじゃない。
- ③ 実は今までの典型的な公害である水俣病やイタイイタイ病でも、因果関係がわかるまでには気の遠くなるような時間と努力がついやされたのであった。
- ④ 一ドル二三百円の経済の時代に入ったという。しかしそれは一体何

を意味するのか。

- ⑤ そうじゃないのよ，チャーリー・ブラウン……私はある組織を代表しているの，このボールはその組織の代表としておさえてるってわけ。
- (2) 「こと」は形式名詞だが，「の」は形式名詞とは言えず，助詞であること。
- ⑥ それはことだ。
- ⑦ 日本の首相が，こんなきつい調子でアメリカを名ざしで非難するなんて，異例のことだよ。
- ⑧ とくに近年，米中の親密度が急速に深まっているのは注目すべきことだ，と……

上例の「こと」の代わりに「の」を入れることはできない。

- (3) 準体助詞の「の」は，三種に分けるべきで（<「こと」と「の」——形式名詞と準体助詞（その1）——>大阪外大留学生別科紀要『日本語・日本文化1号』1969年），それに従って「～のだ」も三種に分かれること。

- ⑨ その辞書は私が（の）昨日買ったS社のだ。……下略の「の」
- ⑩ その辞書は私の買ったのです。……準代名助詞の「の」
- ⑪ 扁理ガ到着シタノデス。（三上章『現代語法序説』）……狭義準体助詞の「の」

そして，問題にするべきは，狭義準体助詞「の」に「だ」「です」などの結び付いたもので，この場合は，その前に来る節の中の主格の「ガ」を「ノ」に変える，三上章氏の，いわゆる「ガノ可変」でないわけで，「～のだ」の形の狭義準体助詞の「の」は「名詞くずれ」がひどいものである。

同様のことは，「わけだ」「はずだ」「ようだ」などでも言える。

- ⑫ 明日あの人が（→×の）来るわけです。
- ⑬ 明日あの人が（→×の）来るようです。
- (4) 「～のだ」は勧誘・当為などの気持を表すことがある。
- ⑭ チャーリー・ブラウン。ボールおさえてるから，走ってきてけるの

よ。

(5) 「～のだ」は詠嘆の気持を表すことがある。

⑮ 副委員長、しげしげと見つめたのでした。

(6) 疑問文としての「～のだ」「～のか」は、林大氏が、<ノ(ダ)は「どうして」「なぜ」「だれが」「いつ」「なにを」などの疑問のことばと相伴って用いられる。また、そのような疑問に答えるべきセンテンスに用いられる。>(参考文献①)と指摘しておられるとおり、

⑯ オレはいま、どこにいるのだろう？

⑰ 東京は、なぜゴミ、ゴミとそうさわぐのか。

のように用いられる。けれども疑問文には常に「の」が現れるかという
とそうではない。

⑱ あなたは行きますか？

⑲ だれが行くか。

といった疑問文もあり得る。

では、そのような「するか」の形の疑問文と、「するのか」形の疑問文、たとえば⑲と

⑳ だれが行くのか。

とはどう違うのか。その違いは、⑳の方は「行く」ことがもうきまったこととして扱われており、疑問は「だれが」の方に向けられるのに対して、⑲の方は、「行く」こと自体にも疑問が向けられるので、少し強く言うと反語になってしまう点にある。

(7) 疑問詞を伴わない「するのか」形の疑問の文でも

㉑ 最近、よく音楽会に行くのだけれど、いつもシラケたまま帰ってくる。指揮者が悪いのか、オーケストラが悪いのか。

のように、「悪いの」の方はきまったこととして扱われていて、疑問は「指揮者が」「オーケストラが」の方に向いていて、「悪いのは指揮者がか、オーケストラがか」ということになり、それは名詞述語文の、

㉒ どなたが上村さんですか。

㉓ 私が上村です。

などの、〈解説—主題〉の転位陰題文に似ている。

「～のだ」は動詞文や形容詞文を名詞文に変えるものだと一応言うことができる。

(8) 本来の名詞文にも

㉔ 私が上村なのです。

のように、「～のです」文ができる。

では、㉔のような文と

㉕ 私が上村です。

とはどう違うのか。㉕の方は単に事実として述べているに過ぎないが、

㉔の方は、説明し、説得するという気持が感じられる。

林大氏は、〈ノ（ダ）は、説明用、説得用のことばである。現実描写でなくて、現場の事実について根拠とか理由とかを述べる。〉とっておられる。

(9) ^{参考文献①}ではなぜ「～のだ」の文は、説明、説得用なのか。それは、いったん判断を表わす述語に「のだ」を付けることによって、形式上、名詞文に——主題に対する解説、説明をする品定め文に——するからであろう。

「～のだ」が文を名詞文化するということは、三上章氏が〈コノ本ヲ読ンダノデスカ——エえ、ソウデス〉と答えが示しているとおられるような現象からも確かめられる。^{参考文献②}

(10) では、「富士山はあの人たちが昨年登った山です」のような、連体修飾語を伴う名詞文と、「～のだ」の文は、どう違うのか。それは「の」の前が、連体修飾語の連体形ではなくて、述語の連体形であり、「の」はそれを固定するために、そして「だ」に結び付けるために付いていて、だから「ガノ可変」ではないのだという所に求められる。「ガノ可変」でない「わけ」「はず」などについても同様に考えられるだろう。

(11) 「～のだ」は「わけた」「はずだ」「ようだ」「そうだ」「ことだ」などと、次の点でも同類だと思われる。

(i) 形式名詞や準体助詞に「だ」が付いた形である点

(ii) 「た」に下接するとともに上接し得る点（述語の構造の中における

表 I

| | | 詞 部 分 | | | | (詞的) 助動詞部分 | | 準助動詞部分 (辞的) 助動詞部分 | | 終 助 詞 部 分 | | |
|---------|---------|--|---------|---------------|------------|--|------------------------|-----------------------------|-----------------------------------|---|---|--------------------------|
| | | A | | | | B | | C | | D | | |
| | | Ai | | Aii | | Bi | Bii | Ci | Cii | Di | Dii | |
| 動 詞 述 語 | 現 形 式 | 核になる動詞 | | 具体的事柄の描写 | | 事柄の成立 | 事柄の個別化 | 事態の判断 | 発話時の判断 | 判 定 (確信・非確信の表明) | 働きかけ (相手に対する働きかけ) | |
| | | 単純 | 派生 | 複合 | 使役受身の接尾語 | ツツテ | ナ | イ | ナイ(補形) | ゾ(ゼ) | | |
| | | 作ル、取ル、降ル、ヤル、モラウ | 春メク、寒ガル | 旅立ツ、目立ツ | 読ミ上ゲル、取リ込ム | 作ラセ始メル 降リ出ス、作リ始メル 作ラレル、作ラセテル、作ラサレル | 作リツツアル 作ツテアル、作ラセテアル | 作ッテアル(クレル・モラウ) 作ッテクル(イク) | 作ッテイル、作ラナイデイル | コトダ モノダ ワケダ ハ ヨウダ・ミダイダ ラ ソウダ(伝聞) | ニウ (ヨウ) ダロウ (デショウ) マイ | カ |
| 補 注 | 表 示 内 容 | 動詞が選ばれることにより格成分が決まる。 | | ハ・モなどを介入させ得る。 | | 事柄の成立(非成立)についての認定 | 発話の現在と事柄の時点との関係の認定。 | 状況に依拠した判断 | 伝聞に依拠した判断 | 話し手の発話の現在の心理状態を表し常に現在形 | 叙述の完了に伴う判定の表明によって主語が受けとめられる | 命令形・禁止のナなどもここまでの内容を含んでいる |
| | | 描叙の焦点の決定、人間関係の決定により、補充成分の格が決定。 尊敬・謙譲の表現の決定。 | | ナイを介入させ得る | | | | 発話の時点又は事柄の時点における情報に依拠 | Ciまでの判断が断言できないものである時の判断(そうでない時はφ) | 確かだとして相手におしつける…ゾ(ゼ) うけあう…トモ おしのける…ワ 不確かで判定できない…カ | つきはなし…サ おしつけ…ヨ(イ) たずねかけ…ネ たしかめ | |
| | | 連体成分に | | 普通になり得る | | 丁寧…の 表 現 | | なりがたい | 非常になりがたい | ならない | | |

「～のだ」の本質を求めて

表Ⅱ

| の (だ) | そう (だ) | らしい | よう (だ) | みたい (だ) | はず (だ) | わけ (だ) | こと (だ) | だけ (だ) | ため (だ) | から (だ) | 上 下 |
|----------|-----------|-----|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ | △ | × | | か (だ) |
| × | × | × | × | × | × | × | × | × | | × | た (だ) |
| × | × | △ | × | × | × | × | × | | △ | △ | だ (だ) |
| × | × | × | △ | △ | × | × | | ○ | × | × | こ (だ) |
| × | × | × | × | × | × | | × | △ | × | × | わ (だ) |
| × | × | × | × | × | | × | × | ○ | × | × | は (だ) |
| × | × | × | × | | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | み (だ) |
| × | × | × | | × | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | よ (だ) |
| ○ | × | | × | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ら (だ) |
| ○ | | × | × | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | そ (だ) |
| | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | の (だ) |

○…付くもの、×…付かないもの、△…普通に付くとは言えないが付く場合もあるもの。
なお「～である」の形からの接続は考えに入れていない。

位置が同じだという点)。相互承接から見れば、「らしい」「そうだ」に近い点。

- (iv) 「きっと」「つまり」「勿論」「おそらく」「どうも」「どうやら」「断然」などの<超格の句>と関係する点。そして、これらの超格の句は、すべて、確からしさの表現であり、それらと関係する「わけだ」「ようだ」「そうだ」などや「～のだ」も確からしさに関係を持つ表現だと思われる点。

これらの形式には、「実は」という超格の句はすべて当てはまる。「実」とは、その判断の出てくるまわりの状況から得られる真実であり、その真実の把握の仕方が、「よう（様）」であり「そう（相）」であり、「らし（さ）」であり「の」であるという表現が、「ようだ」「そうだ」「らしい」「のだ」という形になるのだと考えられる。

- (v) 感情形容詞や希望の「たい」の表現が三人称の主語について、「太郎ハ水ガホシイ」などという点、不自然になるが、それに、これらの形式がついて、「太郎ハ水ガホシイヨウダ」「太郎ハ水ガホシイラシイ」「太郎ハ水ガホシイノダ」となるとすべてまともな表現になる。それについて、寺村秀夫氏が<「ノダ」が「説明的判断」というムードを、「ソウダ」「ラシイ」等が「推量的判断」というムードを表して、文の素材の内容に対する話し手の態度の表明がついていることに由来する>と述べておられるのも「太郎は水がほしい」^{参考文献③}という事態を話し手がその時の状況から「ヨウダ」「ラシイ」「ノダ」と判断したという、状況をふまえての話し手の判断の表現になっているからだと理解される。

- (12) 以上から、「～のだ」は、それが接している文の表す判断が、その判断の出てくる状況（その状況の中には、話し手がよく知っているといったことも含まれる）から、そのまま成り立つことの表現であり、上の文の判断を確かなものとして認定する表現である。状況に基づいて、その判断がすらすら成り立つことの認定の表現であるといっても良い。そこから、説明、解説、説得的な感じも出てくるのである。

また、状況に基づく判断の表現であるということは、状況に必ずる判断の表現でもあり、状況を指す判断の表現でもあるということである。

その後、山口佳也氏は<「のだ」の文について>（『国文研究』56号，早稲田大学1976年6月）を發表された。それは「～のは～のだ」説とも言うべきもので、「のだ」の文を次の四つの型に分けて理解すべきだというもののである。

I （多く、問題となる事態の存在を前提として）

～の+は ～の+だ

（例 外で音がするのは雨が降っているのだ。）

II （問題となる事態の存在を前提として指示語+は ～の+だ

（例 （外で音がする）あれは雨が降っているのだ。）

III （問題となる事態の存在を前提として）

～の+だ

（例 （外で音がする。）雨が降っているのだ。）

IV （問題となる事態の存在を前提として）

仮の題目語+は ～の+だ

（例 （外で音がする。）雨は降っているのだ。）

そして、「～のは～のだ」の形をもつI型の文が、「のだ」の文の最も典型的な文であるとされるのである。

(=)

山口氏の説が、もし「～のだ」が、文を、二重判断的名詞文にするのだということであるならば、私は何ら異議をさしはさむことはない。名詞文的構文であるならば、それは主題と叙述部を持つ題述文であり、その主題がI型のように「～のは」の形で現れることも、II型のように「あれは」の形で現れることもあり得よう。III型は、私の理解では、状況陰題の文であって、「～のだ」の文には、ごく普通のことであると思われる。

問題の主たる点は、「～のは～のだ」を基本ないしは典型とし、すべての「～のだ」に「～のは」の存在を考えようという点、およびⅣ型の、「普通の名詞+は……～のだ」の文の「普通の名詞+は」をすべて「仮の主題」としようという点である。

そこで私は、「～のだ」の本質（『日語学習与研究』1981年3号）を書いて、山口説に対する疑問点を6項目にわたって述べ、あわせて、次のような私見を付け加えた。それは、

「～のだ」の前は述語の連体形になっている。述語の連体形によって表される判断は、話し手（の主観）が責任を持ち、主張するものとしての判断ではなく、一応、話し手（の主観）の責任から切り離されたところで、いわば客体的に成り立つ判断である。

そのことは、次の二つの文

②⑥ この花は白い。

②⑦ 白い花が咲いている。

の中の二つの“白い”を比較することによって理解できるであろう。②⑥の“白い”は話し手がそう判断し、主張しているものであるが、②⑦の“白い”は、当然そういうべきもの、聞き手をも含めて誰が見てもそう言うはずのものとして“白い”と言っているのである。②⑥の“白い”は話し手の主張としてそれを問題にしている。だから、“そんなことはありませんよ”と言えば、それは“白い”ということが否定されることになる。一方、②⑦の“白い”は、問題にならないこと、つまり話し手の判断の直接的な表現ではないために、②⑦に対して、“そんなことはありませんよ”と言っても、それは“白い”のところを否定することにはならず、まず、“咲いている”のところを否定することになる。話し手（の主観）の責任以外のところで成り立つものとしての判断とはそういうことを言っているのである。

「～のだ」の「の」はその前の述語の連体形によって表される判断をいったん固定化し、「だ」はそれをもう一度主観的に断定するものである。この「だ」は「か」に替って疑問になったり、「だろう」に替って

推量になったりする。が、いったん固定された〈述語の連体形+の〉の部分は変らないのである。

といった内容のものであった。

そう考えた奥には、次の誤用例からの示唆があった。

- ㊸ 所で、1月までに日本語を勉強しながら、交流しあいたいために、ときどき日本学生寮にいった。「胡さん、すぐ帰国なさいますから、毎晩きて下さい。」とAさんは2ヶ月前にちゃんと約束してくれたけど……（胡さんの作文）

相手の未来の行動について断言的に「あなたはすぐ帰国なさいますから」などと言うことはない。そう言えば、「帰国なさいます」の部分に話し手の（主観の）責任がかかってきて、まるで予言でもしているようなことになる。ここでは、Aさんが胡さんから帰国の予定を聞いて、知っていたのだから、「帰国されるのですから」のように言うべきところである。「帰国されるの」の部分は、話し手であるAさんの主観の責任から離れたところで成り立っている事態なのである。

- ㊹ 今日は雨が降るから傘を持って行きなさい。

- ㊺ 今日は雨が降るのだから、傘を持って行きなさい。

この二文を比べてみると、㊹の「雨が降るから」は、話し手がそう思っているということを表すが、「雨が降るのだから」の方は、話し手は、そしておそらく聞き手も、天気予報を聞いて、今日、雨が降ることを知っていて、「雨が降るのだから」と言っており、雨が降ることをきまったこととして、理由にしているといった感じがある。

こういっことは、「～のだ」が、状況に基き、状況を拠り所としての判断を表すものだと考えると、すらすらと説明できるのであるが、こういうところを「～のは～のだ」説ではどう説明するのかといったことも疑問の一つであった。

「ようだ」「そうだ」「はずだ」「わけだ」などを山口説ではどう考え、それらと「～のだ」との関わりをどう考えるのかといったことも疑問として提出した。（その他の疑問についてはここでは取り上げない）

山口氏は、〈「～のだ」の文の本質をめぐって〉（『日語学習と研究』1983年5号）で私の疑問に答えを示されたのであるが、前者の疑問に対しては、〈「～から」と「～のだから」の違いは、以上述べてきた「～のだ」の文の本質にてらしておのずから明らかであると思われるが〉として、この例に関しては〈胡さんが何月何日かに帰国する予定になっており、そのことは胡さん自身はもちろん、Aさんもよく知っている。㉘の文は、Aさんがその事態を暗黙のうちに前提とし、問題としつつ、「君が何月何日に帰国する予定であるということは）もうすぐ帰国するということです。（残りの日数も少ないということです）」と述べ、そのことを理由として「（だから）毎晩来てください。」と述べる場合のものであるから、「～のですから」とする方がよいということになる。〉というものであった（下線は佐治による）。下線を施した部分はその通りであるが、「それを基として述べる」か、「それを主題としてそれについて述べる」かが問題なので、私は、山口氏の回答にいかなる「～のは」が現れるのかと思っていたのであるが、「～のは」は現れなかった。

後の方の疑問、「ようだ」「そうだ」等と「～のだ」との関わりについては、〈挙げられた「ようだ」以下の語句がどのような構文論的機能を持つかは一概にはいえないが、筆者としては、少なくとも、それらの語句と「のだ」とをすべて同一の構文論的機能を持つものとする必要は必ずしもないように思われる。〉というものであった。私も「～のだ」と「ようだ」「そうだ」などが「同一の構文論的機能を持つ」とは考えないが、グループとしてまとめ得るような性質を持っていると考えている。その理由はすでに旧稿で示したとおりである。それがそうでないと言われるのなら、理由をあげて、実証的に説いてほしかったと思う。

一方、金榮一氏は〈「新聞が読みたかったです」のうちけし——「～のだ」の文の一側面——〉（『日語学習と研究』1984年2号）において、「するのだ」の否定形は、「～しないのだ」か「するのではない」という問題をめぐって、私が「同じだと言った」文末の判断を表す形式「ようだ」（推定）、「らしい」（推定）、「そうだ」（伝聞）、「はずだ」などと、

表Ⅲ

| 例 文 | 意 味 | | | | | | | | | |
|--|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| | 理由 | 原因 | 限定 | 当為 | 詠嘆 | 説明 | 予定 | 推定 | 伝聞 | 推定 |
| | か | た | だ | こ | わ | は | の | み | よ | そ |
| | ら | め | け | と | け | ず | たい | う | う | しい |
| ① 太郎が行く～です。 | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |
| ② 太郎が行った～です。 | ◎ | ◎ | ◎ | △ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |
| ③ 太郎が行く～でした。 | ○ | ◎ | ◎ | ○ | ○ | ◎ | ○ | ◎ | ○ | △ |
| ④ 太郎が行かない～です。 | ◎ | ◎ | ◎ | △ | ○ | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ |
| ⑤ 太郎が行く～ではない。 | ○ | ◎ | ◎ | △ | ○ | △ | ◎ | △ | △ | × |
| ⑥ 太郎が行く～でもない。 | ○ | ◎ | △ | △ | ○ | △ | ○ | ◎ | ○ | × |
| ⑦ 太郎が行く～（な）のです。 | ◎ | ○ | ◎ | ○ | ◎ | ◎ | × | ◎ | ◎ | ◎ |
| ⑧ あれは太郎だ～です。 | ○ | ## | ## | ## | ## | ## | ## | ## | ◎ | ## |
| ⑨ あれは太郎な～です。 | ## | ## | ## | ## | ## | × | ◎ | ## | × | × |
| ⑩ あれは太郎の～です。 | ## | □ | ## | □ | ## | ◎ | ## | □ | ◎ | ## |
| ⑪ あれは太郎～です。 | □ | ## | △ | ## | ## | ## | □ | ◎ | ## | × |
| ⑫ 太郎が行く～でしょう。 | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | ○ | ◎ | △ | △ | △ |
| ⑬ 太郎が行く～ ^な の、 ^の ことを聞いています。 | ## | × | × | ## | ## | △ | ## | ◎ | △ | △ |
| ⑭ 太郎が行く～であることを聞いている。 | × | × | ○ | ## | × | ○ | ○ | ○ | ○ | × |
| ⑮ 太郎の部屋のカーテンがしまっています。それは太郎がまだねている～です。 | ◎ | ◎ | ## | ## | × | × | ○ | ## | ## | × |
| ⑯ ボトボトと音が聞えるのは雨が降っている～です。 | ◎ | ◎ | △ | ## | × | × | ○ | × | ## | × |
| ⑰ 太郎の部屋のカーテンがしまっています。 <u>それは</u> 太郎がまだねている～です。 | ◎ | △ | × | × | ## | ## | ○ | ## | ## | ## |
| ⑱ 太郎の部屋のカーテンがしまっせいます。太郎がまだねている～です。 | ◎ | ◎ | ## | ## | × | × | ○ | ◎ | ◎ | ○ |
| ⑲ 太郎の部屋のカーテンがしまっています。太郎はまだねている～です。 | △ | × | ## | ## | × | × | ◎ | ◎ | ◎ | ○ |
| ⑳ (太郎の部屋のカーテンがしまっているのを見て)太郎はまだねている～(だ)。 | ## | ## | ## | ## | ○ | ◎ | ◎ | ◎ | ◎ | △ |
| ㉑ (ぐったりしている人を見て)もしもし、どうされた～ですか。 | ## | ## | ## | ## | ## | ## | ◎ | ## | ## | ## |
| ㉒ (ぐったりしている人を見て)あの人は気分が悪い～だ(です)。 | × | × | × | ## | × | × | ◎ | ◎ | ◎ | △ |
| ㉓ (他からの情報を得て)太郎はアメリカに行った～です。 | × | × | × | ## | × | ○ | ○ | ○ | ◎ | ◎ |

記号、◎ 全員が含むとしたもの、○ 専以上が言うとしたもの、# 全員が言わないとしたもの、
 × 専以上が言わないとしたもの、△ どれも専を越えないもの、□ 意味の変わるもの。

「～のだ」には、打ち消しの表現に関して違いがあるということを述べられた。

そこで私は、＜「～のだ」再説——山口佳也氏・金榮一氏にこたえて——＞（『日語学習と研究』1986年1号、2号）において、金榮一氏に対しては、私が「同じだ」と言ったのは、前に示したような点——構造とか、「ガ・ノ可変」でないとか、「た」に上接したり、下接したりするとか——についてであって、全面的に「同じだ」と言っているのではないことを説明し、そういう表現をするかしないかを調べた表（表Ⅲとして次に再録する）や、述語の層の中でのこれらの形式が占める位置を示す表（その改良したものを表Ⅰとして先に示した）とこれらの形式の相互承接表（表Ⅱ）を示して、これらの形式がどの点で同じで、どの点で異なるかを示して答とした。

山口氏の説に関しては、＜佐治（1972年）＞と＜山口（1975年）＞の共通点をあげ、「～のだ」の文を四つに分けられる点も、最後のⅣの「仮の主題」を除いて同意できる旨を記し、表Ⅲを基として、次のように記した。

「～のだ」の文は、山口氏の説かれるとおり、状況・事態を言語化し、それを「～のは」の形で主題化した題述文の叙述部になり得る（山口説のⅠ型、表Ⅲの例文⑮⑯）とともに、前文あるいは先行文脈によって言語化された状況事態を指示代名詞で受けて「それは」などの形で主題とした文の叙述部にもなり得る（山口説のⅡ型、表Ⅲの例文⑰）のであるが、それは林四郎氏が「文末の述語について、文に解説性を与える付属形式」と呼ばれる（『文の姿勢の研究』1973年）「からだ」「ためだ」等にも共通に見られることである。

また、状況・事態が前文または先行文脈として言語化されている場合に、それとは形の上の直接的な繋りを持たない形で、表面に表された主題を持たない文として、前文または先行文脈の描く状況・事態そのものを言及の対象＝主題（ただしこの場合には表に顕れない陰題）として、それを説明する文にもなり得る（山口説のⅢ型、表Ⅲの例文⑱）点でも、「のだ」は「からだ」「ためだ」等と同じである。ところが、その場合

表Ⅳ

| 前提として存在する状況・事態 | | | | | | |
|----------------------------------|---|---|----------------------------------|---------------------|----------------------------|-------------------|
| 言語化された状況・事態 | | | | 言語化されていない状況・事態 | | |
| a | b | c | d | e | f | g |
| 状況・事態そのものが「～のは」の形でその文の主題となっている場合 | 状況・事態を受けた指示代名詞が「それは」などの形でその文の主題となっている場合 | 前文と切れてはいるが、その文には主題がなくその文全体が前文、先行文脈の事態を指している場合 | 前文と切れていて、その文に別のものが主題として顕示されている場合 | 眼前の状況・事態が判断の基礎である場合 | 眼前から離れた状況や事態や情報が判断の基礎である場合 | 他からの情報が判断の基礎である場合 |
| の だ | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |

には、「みたいだ」「ようだ」「らしい」などもそのような文を作り得る(表Ⅲの例文⑱)のである。

事実が以上に限られているのであれば、「～のは～のだ」説に異をとなえる必要もそれほどはないのであるが、状況・事態が言語化されていても、これらの形式の付く文が状況・事態以外の顕示された主題を持つと「からだ」「ためだ」はほとんど言えなくなるのに対して、「みたいだ」「ようだ」「らしい」などは言うことができ、「のだ」も言うことができる点(表Ⅲの例文⑱)、また、状況・事態が言語化されていない場合には、「からだ」「ためだ」はまったく言えなくなってしまうのに対し、「はずだ」「みたいだ」「ようだ」「らしい」等は言うことができ、「のだ」も言うことができる点(表Ⅲの例文⑳)や伝聞に基づく場合にも「のだ」は「そうだ」「らしい」などとにも言える点(表Ⅲの例文㉓)で、「～のだ」の文の基本は「～のは……～のだ」だという説には同意できないのである。

以上を図示したものが次の表Ⅳである。

この表から分かることは、「～のだ」は、何らかの意味で状況・事態を顕在化して主題とする文を「～からだ」「～ためだ」と同じように作ることができるとともに、状況事態を顕在化して主題とするのできない「ようだ」「みたいだ」「はずだ」「らしい」「そうだ」と同様に、状況・事態に基いた判断を表すこともできる形式である。山口説は「～のだ」の半面だけを持ってきて、それであとの半面をも説明しようとするものだと思われる。

山口氏は<再び「～のだ」の文の本質をめぐって——佐治圭三氏の論に寄せて——>（『日語学習と研究』1987年1号）によって、考えを示されたので、この部分に対する氏の批判から記していくならば、氏は、私がなぜ上述のようなことを言っているのか、「率直に言って、筆者には、この批判の趣旨が正確に理解できない。」と言われた上で、

その第1は、「～のは～からだ」「～のは～ためだ」と「～のは～のだ」（I型）とは、もともとかなり異なった性格の文で、これを単純に並べて論じることは危険であろうということである。前者は広義の転位の文と考えられるが、後者はそうではない。（後略）

その第2は、「～みたいだ」以下の形式が状況・事態に基づいた判断を表す形式と言えるかどうかはともかく、少なくとも「～のだ」はそういう形式とは言えないだろうということである。筆者が、「のだ」の文を、ある場面・事柄について、それがどういう事態・事柄と言えるかの判断を表す形式であると考えていることは、既に（二）でも述べたので、詳しくは繰り返さない。

と記しておられる。私は、「～のだ」は「からだ」「ためだ」「ようだ」「そうだ」よりも広い使用域をもっていて、「～のは～のだ」説はその全体を覆えないのではないかということが言いたかったのであるが、それはともかくとして、第2の部分に、下線を引いて示されたように、「～のだ」が状況・事態に基づいた判断を表し得るか、ある事態・事柄について、述べる形式であるのかという点が、まさに考えの分かれる点で、私はそれを、他の形式との比較ということで説明しようとしたのであるが、山口氏

は自説をくり返すにとどめておられた。「ようだ」「そうだ」「らしい」「はずだ」などの構文論的職能と「～のだ」のそれに類似点がないのならば、そのことを論証してほしかったと思う。

山口氏は、氏が「のだ」の文を一種の名詞文とされるのに対して、私が<「～のだ」の文は、題述文と考えられるが、(中略)その「の」が「名詞くずれ」(三上章)を起こしている以上、普通の名詞文とは考えられない。>と述べたことに対して、普通の場合、連体語句中に用いることがないとされている種類のものが、音調上、意味上の強勢が加えられると、連体語句中で用いることができるようになる、として、「～は」(対比的とりたて)、「～が」(逆接)「～けれども」「～から」(理由)の語句が連体語句中に出てくる例を挙げておられるが、私には、それが今の議論にどういう意味を持つのかよくわからない。ただ、氏が<同様のことが、「の(だ)」に上接する語句中でも見られる。>としてあげておられる例

㊹ 夜は電灯の設備がありますから、洋灯を点す手数は要らないのです。

(夏目漱石「行く」)(下線は山口氏)

は、私には、「洋灯を点す手数は」の部分は主題であって、「の」で受けられているというより、「要らないのです」全体が叙述部として受けているように見える。

また、「のだ」の「の」が、「ガノ可変」でなくもないということで、例として

㊺ 是は寧ろ平岡の悪いのではない。全く自分の過である。(夏目漱石「それから」)

ほか、三つの文をあげておられるが、漱石や国木田独歩や正宗白鳥の作品で、どうも現代語の例とは言い難く、もし

㊻ あの方の結婚式には私～行くのです。

の「～」に、現代の標準的なことばを身につけている人たちに、「が」か「の」かを入れてもらったら、おそらく「の」はほとんど現れないのではないかと思う。

次に私は、高校用教科書『現代文』（東京書籍1983年）で調べたところ、「～のだ」の文、267例中、「～のは～のだ」が3例で、わずか1.1%で、それでは「～のだ」の文の基本が「～のは～のだ」だとすることが疑われると書いたことについて、山口氏は、それは始めから予想されたことで問題ではない、たとえ少くとも「～のは～のだ」型や「それは～のだ」型が存在するという厳然たる事実が大切なのだと言われる。私は「～のだ」は題述文を作る形式だと思うし、その主題の一つに「～のは」があることを否定するものではない。ただ私は、「～のは」以外の山口氏が「仮の題目」と言われる普通の名詞による主題が「～のだ」の文では大部分を占めているという厳然たる事実の方が大事だと思うのである。

(三)

山口説に対して、私が異議をとなえるべきだと思うのは、山口説Ⅳ型の「仮の題目」に対してである。

㉔ しかし芭蕉の耳は激動する台風の響きに奪われているのではなく、
実に「盥」に雨を聞いている。（『現代文』東京書籍）

㉕ 友人は王が巡撫に玉璜を売りつける気で来たと思っただのか、冷たい
皮肉な目でジロジロ王の態度をしらべていた。（同上）

の例において、私には、「芭蕉の耳は」は「奪われているのではなく」で止まっているのではなく、文末の「聞いている。」まで係っていく「真の主題」だと思われるし、「友人は」も「しらべていた。」まで係っていて、「真の主題」というべきものだと思う。

山口氏はそれに対して、以下のように述べられる。

拙論では、Ⅳ型の現に備えている題目は、正しい意味で「～のだ」（体言相当語句＋だ）全体と共同して「AはBだ」という指定表現を形成しているとは言えず、「～のだ」全体と共同して指定表現を形成する真の題目が状況の中に別に想定できるはずだと考えた。結局、Ⅳ型は、真の題目を状況に委ねて言表せず、代わりに、本来「～の（だ）」の中

に収まるべき連用語句を新たに題目として立てた形であると言える。その意味では、Ⅳ型の備えている題目は、「仮の題目」というより、「二次的な題目」と呼ぶ方が適切であったかもしれない。

しかし、「仮の題目」（二次的な題目）も、題目であることに変わりはなく、そのかかりが文の末尾に及ぶことは、かえってそれが普通のことだと言わなければならない。また、一つの題目が、文中のある部分には「仮の題目」（二次的な題目）として、また別の部分には「真の題目」としてかかっているということも、あっておかしくない。佐治氏の示された例は、ともにそのような例と言える。いま例文のうち、前者について見ると、「芭蕉の耳は」は、「～のではなく」には「仮の題目」として、「～聞いている」には「真の題目」としてかかっていると考えることができる。

このことは、例えば、

③④ コーヒーは、先ほど入れたが、もう冷めてしまった。

において、同じ「コーヒー」が、

コーヒー（を）は→入れたが

コーヒー（が）は→冷めてしまった

のように、文の異なる部分に、異なる格関係を内在させつつかかっているのと似ている。

とし、注の形で次のように述べられた。

このように考えることは、次のように「～のは、仮の題目+は、～のだ」という形が存在することからも、無稽のこととは言えないであろう。

③⑤ 縁側に座蒲団が一つあって人影も見えず、障子も立て切っているのは御師匠さんは湯にでも行ったのか知らん。（夏目漱石「吾輩は猫である」）

③⑥ それだけの話で、二時間もかかった。それがほんの短い時間とし
か思われなかったのは、よほど典山は名人だったのであろう。（宇野信夫「ことば読本」）

山口氏の説にあるように、二次的な主題というものは考えることができ

る。たとえば、

⑳ 象は鼻が長い。

の「鼻が」をとりたてて

㉑ 象は鼻は長い。

とは言える。しかし、その場合でも主題「象は」は最後まで係って行く。私が問題にしたいのは、㉒や㉓のような構造の文で、最初にあった「真の主題」が途中で納まってしまって「仮の主題」が途中から真の主題にかわるというようなことがあり得るかどうかということである。

たとえば、㉑を書きかえて、

㉒ 象は鼻は長く、上手に物をつかむ。

といった文がある(?)として、「象は」は「長く」のところで納まってしまって、「上手に物をつかむ」の主題は「鼻は」と考えることができるかどうか。

また、㉔の例においては、論理的格関係は「入れたが」と「冷めてしまった」のところで替っていても、主題は「コーヒーは」であって、最後まで係っており、「真の主題」が途中で消えてしまう例にはなっていない。

私が、また、「～のだ」の形は、本来その中に主題を取りこむことのできない順接仮定条件の「～のなら」や「のだったら」という形をとっても現れる。

㉓ 君が行くのなら、私は行かない。

㉔ 品物が駅に来ているのだったら、明日とりに行きます。

と言ったことに対して、山口氏は、

確かに、「～のなら」「～のだったら」などには、「～のは」「それは」などの題目をそのままの形で取り込むことはできない。しかし、これは、「AはBだ」という形に共通して言えることであって、「のだ」の文だけに見られる現象ではない。この場合、「Aは」を「～なら」「～だったら」の中に取り込むためには、「Aが」の形にする必要がある。「のだ」の文の場合、題目は「～のが」「それが」などの形をとって、「～のが～のなら」「～のが～のだったら」「それが～のなら」

「それが～のだったら」などの形を作ることになろうが、それは十分に可能であろうと考えられる。

要するに、「～のは」「それは」などがそのままの形で「～のなら」「～のだったら」の中に取り込まれ得ないことは、「のだ」の文に常に「～のは」又はそれに準じる題目を想定しようとするものの障害とはならないと考える。

と述べられた。

私が言いたいのは、㊸にあつては、「君が行くののなら」は従属句であつて、いかなる主題も受けとめることはできず、㊸の全体の主題は「私は」であつて、他にあり得ないということなのである。㊹でも同様である。

もし、「君が行くののなら」や「品物が駅に来ているのだったら」に「真の主題」があるのだったら、その中に「～のが」「それが」を入れて示していただければと思う。もしそれができないのなら、「～のだ」の文には常に「～のは」が題目として存在しているとは言えないことになると思うのである。私は、こういう問題については、「～のだ」は状況をふまえての話し手の判断を表す一種の助動詞的形式だとすることで、すぐに説明がつくと思うのである。

なお、ついでに言っておければ、㊸は

㊸' 君が行くなら、私は行かない。

と言っても同様であつて、ここには準体助詞の「の」はないのである。「～のだ」の「の」は、体言相当語句というよりは、前の述語の連体形を固定化するために存在する、佐久間鼎氏のいわゆる「吸着語」であると考えの方が良いという理由がここにもある。

もう一つ、「～のだ」の「の」がまともな名詞ではない証拠を付け加えるなら、

㊹ あの人はアメリカへ行ってしまったそうなんです。

のように、普通その後には名詞が来ない伝聞の「そうだ」の後にも「～のだ」は来得るということもある。

山口氏は、また、私が「～のだ」の「の」を一応準体助詞と認めながら、

＜この「の」は上接する一連の語句を体言的にまとめる力を失っているとし＞ていると言われるが、私はそんなことをどこにも書いてはいない。私が言っているのは、「～のだ」の「の」は、普通の名詞のように、連体修飾語を受けとめることができないということで、上の述語の連体形を「の」は固定化し、その連体形の述語を体言化するものだと言っているのである。

また、氏は、

- ④ 堀は、わたしがつまみ出しては何か食っているのを見て、それがクワイを食っているのだということを知って、面白がって一人で見ていたものらしい。(中野重治「ふたしかな記憶」)

の例によって、私の説ではどうなるのかということを推定しておられる。私は、＜その行動＝クワイを食っているの＞だと見るわけで、この場合には、「クワイを食っているのがそれ(その行動)だ」と転位文のように考えていいところだと思う。

「～のは」が「～のだ」の文の主題になり得ること、また、言い表されない状況が「～のだ」の文の主題になること(あるいはなり得ること)を私は一度も否定したことはない。「～のだ」はたしかにそういうことのできる形式であるとともに、それ以外の主題をも受けうる文末形式だと言っているのである。

結局、意見の異なる点は、「～のは」あるいは、それを受けた「それは」以外の名詞が主題として現れた場合、たとえば、②の「芭蕉の耳は」とか、③の「友人は」とかを主題とみるか、それは「仮の題目」であって、「～のは」なる「真の題目」があるかという点にある。

主題というものは、それが分かっているなければ、文が理解できないものである。②や③を読んでいる時、われわれはいったいいかなる「～のは」を思い浮かべているのであろうか。少くとも私は、何の「～のは」をも思い浮かべないし、それでもこの文はちゃんとわかっていると思っている。思い浮かべる必要のない主題など、最初からありはしないものなのだと思うべきで、②や③では、状況が判断の対象ではなく、判断の対象＝主題は、「芭蕉の耳」や「友人」であって、広い意味での状況は、判断が出てくる

ための拠り所になっていると見るべきで、そう思うのは、何度も言うように、「～のだ」と同類の表現だと思われる「はずだ」「わけだ」「ようだ」「そうだ(伝聞)」などが、何かを拠り所にした判断を表す形式であるということもある。

「～のだ」はこれらの形式と同類の職能を担う形式で、「の」には「よう」「そう」「はず」「わけ」のような意味がないところにその特別な点があり、なんらかの事態を、成り立つ、あるいは成り立っているものとした上で判断を加える形式だと言いなおしても良いと思う。

「～のだ」に関しては、他にも言及すべきものがあるが、時間と紙幅の制約によって、今回はそれができないが、以上で、一応、山口氏の論に答えることができたと思う。いろいろな事情で今日までこの稿の執筆ができなかったことについて、山口氏に対して、その失礼をお詫びするとともに、『日語学習と研究』には、できるだけ早い機会に本稿に基づいたものを投稿することによって読者にお応えしたい旨を記して、本稿を閉じることとしたい。

参考文献

- ① 林大「ダとナノダ」(『講座現代語6, 口語文法の問題点』明治書院1964年)
- ② 三上章『現代語法序説——シンタクスの試み——』くろしお出版1953年
- ③ 寺村秀夫「“タ”の意味と機能——アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ——」(岩倉具実教授退職記念論文集『言語学と日本語問題』くろしお出版1971年)
- ④ 佐治圭三<「こと」と「の」——形式名詞と準体助詞(その1)——>大阪外国語大学留学生別科紀要『日本語・日本文化1号』1969年
- ⑤ 佐治圭三<「ことだ」と「のだ」——形式名詞と準体助詞(その2)——>大阪外国語大学留学生別科紀要『日本語・日本文化3号』1972年
- ⑥ 山口佳也<「のだ」の文について>『国文研究』56号 早稲田大学 1976年
- ⑦ 金栄一<「新聞が読みたかったのです」のうちけし——「～のだ」の文の側面——>『日語学習と研究』1984年2号
- ⑧ 林四郎『文の姿勢の研究』1973年
- ⑨ 佐治圭三<「～のだ」再説——山口佳也氏・金栄一氏にこたえて——>『日語

学習と研究』1986年1号2号

- ⑩ 小矢野哲夫「のだ」をめぐる諸問題（『島田勇雄先生古稀記念 ことばの論文集』明治書院1981年
- ⑪ 山口佳也〈再び「～のだ」の文をめぐる——佐治圭三氏の論に寄せて——〉
（日語学習と研究1987年1号）

（さじ けいぞう 文学部教授）